

令和5年度 学校教育評価表（長等小学校）

評価の基準（A：よくできた B：できた C：あまりできなかった D：まったくできなかった）

項 目		評 価 の 観 点	自己評価 (A・B・C・D)	学校関係者評価 (A・B・C・D)	教職員自由記述(評価の理由など)	学校関係者自由記述(評価の理由など)	次年度への提言	関連するSDGsの 目標(参考)
主体的・対話的で深い学 び	1	支持的風土を育てる学級・学年集団づくりの実 践	B	A	○研究会があることで、全体として意識が高まり、学年団としてよりよい授業づくりについて考え、実践することはできた。OJT研修を通して、それぞれの持ち味を教えていただき、活用させていただく機会を得ることができた。○子どもたちの思いを大切にした学級集団づくりを目指して、日々子どもたちに寄り添うことができた。生活科・社会科を中心に、単元の出口を見据えた授業づくりに取り組むことができた。○学級会を活用して、支持的風土がある学級を目指し、学級・学年集団作りを行った。また、社会科の授業や学級会を通して、主体的・対話的で深い学びを追究する学習を行った。授業研究会や研修会も少しずつ効果的になってきた○●それぞれの児童の持ち味を大切にすることや、進んで取り組んでいる授業での頑張りを評価すること、学習で身についてきたこと等を、みんなの中で評価することを通して、支持的な風土の育成に努めてきたが、児童の中には、依然としてマイナス面を指摘したり、自分の話題のみに終始したりすることも多く、引き続き指導の機会を持つ必要がある。○子供たちの素直さ、まじめさから教師の言葉をきちんと受け止め、より良い行動を自分なりに考えて行動する素地がある。そのため、ある程度、指導が疎かになっても良い雰囲気学の学級風土が作り上がると感じる。	○学級会を柱として、集団作りを行っていて、落ち着いた授業の様子を見せてもらっている。○なかよし大作戦など、異年齢交流やたてわり活動を計画的に進めていて、心が育つ機会が豊かにあると思う。○運動会のたてわり競技は、学年を超えての交わり、団結を経験することができる。言葉のかけ方、見守り、協力、助け合いなど、周への思いやる心を育てる場となると考えている。○一人ひとりの先生方が、前向きに取り組んでいると感じている。	研修：以前、長等で力を入れていた仲間づくりは、主体的な学びを生み出す基本である。次年度以降も、どのクラスにも支持的風土がふられ、安心して学級会や授業が行える状態を目指していきたい。 研修：項目「指導改善」とも関わることで、生活科・社会科の研究を推進していく上で、授業づくりや大会運営に関する情報の発信を大切にしていきたい。 情報部：ICTの効果的な活用については、今後情報部を通じて発信していきたい。また、教育の情報化リーダー研修で得た生活部も共有し、より効果的な情報機器の使い方を身につけられるようにしたい。 研究会研修など他校と比べ実践しているが、教員としての評価は普通。学年団ではそれぞれでがんばっているものの全体としての系統的なつながりや積み上げ「みんなぞ」という意識になっていない。発表ありきではあるものの、児童の実態を共有し、今、子どもたちに必要な力について話し合ったり、実際に合同研究を進めていった方がよい。学級会を基盤とした支持的風土がある学級づくりを行い、社会科を窓口にして子どもたちに主体的・対話的で深い学びができる授業を提供していく。「さくら」としてできることを考え、研究を行っていかなければならない。長等小としての柱が必要。学級会の切り口は長等小の強み+社会+生活でやりとりをしている場面→一環、近畿へ向けての輪が必要。	
	2	協働する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善(ICTの活用含む)	B					
	3	主体的・対話的で深い学びを追究する授業研究や研修会の実施	B					
道徳教育の充実	4	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる活動の実施	B	A	●ジェンダーについて、学校全体で共通認識ができるように子どもたちにも学年段階にあった指導をしていった方がよいと思う。○●「いじめは許されない！」ということや、道徳の授業だけでなく、様々な場面で子どもたちと共に考えることができた。授業参観では、道徳の授業を公開した。●学校全体としての授業や評価に関する研究には至っていない。授業公開も全クラス行っていないため。●物語を読んだり、日常で困ったこと等を話し合う中で、「友だちと気持ち良く過ごす」というめあてを意識しているようになってきているが、自分の思いのみでの行動が見られたり、「仲良く過ごす」という目標を実現するための技能がまだ身につけていないため、道徳的な面により一層の成熟のため、指導が必要である。○子供たちの素直さ、まじめさから教師の言葉をきちんと受け止め、より良い行動を自分なりに考えて行動する素地がある。そのため、ある程度、指導が疎かになっても良い雰囲気学の学級風土が作り上がると感じる。●校内でも、道徳の研修に力を入れていべきだと思います。	○なかよし大作戦など、異年齢交流やたてわり活動を計画的に進めていて、心が育つ機会が豊かにあると思う。○自分の気持ち、相手の気持ちを書き込むことができています。○具体的な授業は見えていないが、授業外の子どもの姿からよい評価をした。	参観日に年1回、道徳の学習の授業公開を行う。人権教育で学習した内容など、作文は放送で発表し、標語は、子どもの目に触れるところに掲示する必要があるのではないかと。日々の積み重ねではあるが、いろいろな課題のある児童もいる。校内での「ジェンダー」理解も十分ではないため、まず、教員自体の研修が必要である。授業公開が徹底されていないので、年度初めに提案が必要である。参観を行っていくべきである。学年間の道徳授業の情報共有・公開を行っていく。また、学級の課題に合わせた道徳教育を行い、問題行動の未然防止につなげていく。道徳の公開は年1回はやるべきである。道徳部会から道徳の情報発信しり次年度に残したりしていくようにするなどしていく必要があり、学年学級単位になっていて若手が学べる機会が必要である。いじめ・性教育・ジェンダーについて学校全体で共通認識ができるよう、職員が研修を受け知識を増やしていきたい。道徳・人権教育として担当中心に教員全体で系統立てて取り組んで行ければよいと思う。参観で道徳を公開することで道徳の授業力を高めていく。	 
	5	ものごとを様々な視点からとらえ考えさせる道徳科の授業・評価に関する研究	B					
	6	保護者等への道徳科の授業公開	B					
体力づくり	7	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善	B	A	○体育の学習や体育委員会のイベントがあると、休み時間に自主的に練習をしたり、クラスでしよう話し合い活動を通して取り組んだりすることができたから。○●子どもたちが、運動に対して苦手意識を持たないように場の設定を工夫することができた。例えば、マットの配置や補助の仕方など、けがなく楽しく運動に向き合うことができるようにした。一方で、経験した運動を今後も続けていくかどうかという点については、その段階まで子どもたちの興味を高めることができなかったように感じている。○●高学年は、今年度体育専科の先生のおかげで魅力ある授業が行われていた。ただ、生涯に渡る意識づけは、できていないと考える。○●トレーニング等の授業を活用することで、体を動かすことへの抵抗はなくなってきた。また、友だちと共に活動する楽しさも徐々に感じられるようになってきているが、「自分から…」という部分での成長はもう少し見られず、引き続き指導に努める。○●専科という立場から、系統性を考えて教材研究を行うことができた。教えることを絞ったことで明確な課題を設定して授業を進めることができた。ただ、「生涯にわたって…」と考えるとやはり、学校全体で授業改善に取り組んでいく必要があると考える。○体育部を中心に、体力づくりの取組が年々充実してきていると感じています。	○長等小として体育専科の教員がいると聞き、熱心さが伝わってきた。○授業づくりの工夫を常に行っていて参観をいつも楽しみにしている。○日々の宿題体育カード継続した体力作りが行われている。	委員会活動などとも合わせて、外で仲間と遊経験を積み重ねていくことが大切である。少し何か取り組みができると運動好きになるのではないかと。環境整備が必要。体育の授業改善。子どもがやりたくなる体育。	 
	8	体力づくりを推進する運動実践	B					
	9	生涯にわたって健康を保持増進し、進んで体を動かそうとする意欲の育成	B					
指導改善 (組織的・計画的)	10	学力向上を目指した指導体制・指導方法の工夫改善	B	A	○少人数教室を通して子どもたち全員に発言する機会をつくったり、困っている子どもを支援する機会が増えたから。●校内研で、生活科と社会科を窓口にして授業づくりに取り組んだが、よりよい授業を実践していくための発信が少なかった。○18時30分退勤日の設定があることや、教頭先生が声をかけてくださる時刻が決まっていることなど、その時間を意識して仕事に取り組むことができた。○指導のありかた、学習の進め方等、いろんなことを学年で共有していたため、計画的に進めることができた。また、研修などでも働き方の工夫を話し合い、よりよい働き方について考えることができた。●働き方改革については、マニュアル化できるものが少なく、取り組むことは難しかった。○狭義での「学力」については不十分な部分もあるが、決められた学習ではなく、自分の興味を持ったことには、どんどん積極的に、能動的に学習する力は日々の授業の中で育ててきている。○学年会で共通理解されている姿をよく見ます。大事なことで、今後も毎日短時間でもよいので継続したいです。○長等スタンダードの存在が大きいかと思います。どの教科にも通じる汎用性を持っていると感じています。	○職員全体として、組織的に一丸となって様々なことに取り組まれていると感じる。○先生方の礼儀正しい姿を見せてもらっており、教師としての使命を自覚する業研修していると推察している。○子ども一人ひとりの進む速さに寄り添った関わりしていると感じている。○組織を生かし、指導体制の工夫に尽力していると感じる。○教職員で話し合い教育力向上をめざしていると感じる。○授業参観や栽培の機会で知る限り、大変熱心に取り組んでいると感じている。	情報部：働き方改革の一環として、メタモジの共有フォルダを使い、安全管理表や校内研修の指導案などのペーパーレス化を提案する。 研修：来年度は、4月に校内研全体提案を行い、5月(社会科)・6月(生活科)に授業公開を行う計画を進めている。その中で、大会に向けたよりよい授業づくりについて協議を進めていきたい。会議(小さなものも含めて)では、まだまだ、終わる時間を設定していないから延びていく。会を進める側があらかじめしっかりコントロールして働き方改革につなげていきたい。	 
	11	教職員の指導力、情報活用能力、及び組織的な教育力の向上	B					
	12	働き方改革の取組と教育活動の質の改善	B					
育ちと学びを支える連 携								
① 家庭・地域との 連携・協働	13	子育てや家庭教育に対する 保護者への積極的な支援	B	A	○子どもたちのことをできる範囲にはなるが、保護者の方に伝えるようにしてきたから。○電話や連絡帳を使って、保護者に子どもの様子を伝えることができた。必要に応じて、学校に来ていただいたり家庭訪問をしたりすることで、子どもたちのことについてしっかり話することができた。○防災教育等で地域の消防団と協力し、避難所設営や災害への備えなどをより体験的に学習することができたから。○教務の先生を中心に、できていると感じるため。○もう少し細かいところでも連絡をとり、連携をとることで、よりよい教育ができたのではないかとと思う。○日々連絡帳等を通じて、子どもたちの様子や成長等を伝え、共有できるようにしている。○行き過ぎた要望が圧倒的に少なく、学校からの要望に対しても他校と比べてもとても協力的。教師としては、非常にやりやすい環境だと感じる。○不審者の避難訓練を警察の方に来ていただくて、本番のように実施したことがよかったです。私たち教職員がどのように行動すべきか実際に経験することでより深く考えさせられました。○地域が子育てに対して非常に熱心であると感じています。その思いと学校の教育活動がよつながらる取組が構築できればいいなと思います。	○地域との交流に尽力していた。○地域との連携を推進していて、実効性のある取組が実施されていると感じる。○メール配信やテールの活用をこまめに行っていて、保護者連絡の取りこぼしが無いように配慮していると感じる。○避難訓練の経験が大人より素早い対応につながると感じている。○年々、地域との人材活用の取組に尽力して、充実できていると感じる。○特に長等小学校は、地域・家庭との連携が図られていると感じる。○運営協議会から感じることは、もっと地域に頼ってもらってもよいということだ。	地域の人材の取組活用を学年ごとにどのような方にどのような内容でお世話になったのか、分かるような申し送りが必要である。授業が楽しいことを学級通信などで発信を行っていく。	   
	14	保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会、研修会の実施、地域人材の活用	B					
	15	防災教育・感染症対策等の推進を含む、地域の実態に応じた安心・安全な学校づくり	B					
② 保幼小中の連 携	16	子どもの校種間交流や教員の出前授業	B	A	○学校としては交流する機会をつくっているから。○長等幼稚園と合同で、研修会や公開授業研究会、研究発表協議会を開催することができた。それぞれの研究構想を交流することで、幼稚園と低学年の学びのつながりを少しかではあるが見出すことができた。○学年として、5・5交流などの保幼小連携を行ったり、別活動部会を通じて、学級会を中学校の教員にも参加してもらえよう公開授業を行ったりした。○研究や55交流などで図れていると考えられるため。○長等幼稚園の保育を見に行くことで、子どもの見方、学習の進め方等の考え方が広がった。○研究会等を共同で行うことで、普段考えて指導しておられることや、考えておられることを聞くことができた。○幼稚園の保育づくりを知れていることは非常に大きいと思います。今後も続けていく価値があると感じています。	○長等幼稚園との合同研修会などに熱心に取り組んでいた。○55交流の際、学校と長等幼稚園とで日程を決めた後、参加の可否を問われてきた。園児の半数以上が進学するので日程調整では配慮いただきたい。●「教員の出前授業」について、5歳児後半に機会あればぜひお願いしたい。○積極的に授業公開をして連携を推進している。○幼小合同研修会に取り組むにあたって、計画性もあり、先生方の姿勢や意欲に感心感謝している。○皇子山中、長等幼tの交流は良い経験となっている。○とてもよく連携している。○地域の中での保幼小中との関係が築かれている。	教育部：次年度以降は、合同授業研究会がなくなるが、生活科の授業づくりにおいては、園の先生との連携を図っていくようにする。 5年前のように1年生が年長児を迎えて授業体験を行う。教務に負担はかかるが、小学校から保幼小に出前授業を行う。55交流やOSK会議の様子を職員会議などで報告、参加協力などを行っていく。小中連携は中学校がリードしてくれるのは有難いが、話し合いの場を持ちたい。	
	17	校種間の授業公開や合同研修会	B					
	18	保幼小中の接続期の教育課程編成等、円滑な接続を図る校種間のカリキュラム研究	B					
組織的体制の充 実								
① 生徒指導体制の充 実	19	いじめや暴力行為、不登校等生徒指導上の諸課題の早期発見、日常的な予防指導 ※	B	A	○何かあった時には、学年→生徒指導(教務主任など)にすぐに伝えて対応していたから。○管理職や生徒指導、特別支援担当の先生と情報共有をしなが、いじめや不登校児童への対応をすることができた。不登校児童については、関係機関との連携の仕方に少し難しさを感じたが、保護者とのつながりは少しずつではあるが楽しいことができた。○休み時間を児童と共に過ごすことで、早期発見することができた。○●アンケートも活用して早期発見を心がけていると思う。しかし、さらに全職員がアンテナを高くして体制を充実させる必要があると思うため。○毎週の打ち合わせにて児童の情報共有や、生徒指導主任へ報告・連絡・相談といった組織的な対応ができていた。○いじめや暴力行為がないように考え、未然防止に努めるため、言葉かけをしたりや約束等を決めたりしてきたことで、ずいぶん頻度は下がってきているが、依然として見られることもあり、引き続き指導に努めなければならないと考えている。○組織対応をとてももらっていると思います。○日々時間がない中で、上手く時間を見つけて組織的な取組が行えていると思います。	○いじめの月別グラフなど、意識して対策をとっていると感じた。○地域との連携がよくわかる。	生指：細かいことも学年で共有することが大切。「子どもが帰るまで」「子どもと保護者が会うまで」の2つのタイミングを意識した情報共有を徹底する必要がある。 金曜日の打合せで他の学年の様子を把握することができるので、今後も活用していくべきだと思う。学年での情報共有をしかり行い、学校につなげていくことが大切である。若手としての困り・不安を持つところが大きく、組織的に学校が動けたのはよかった。生徒指導についても学びたいという声があった。生徒指導主任への連絡は早く、しかし、学年主任中心に動く体制は意識していきたい。子どもが下校するまでの判断が大切である。	  
	20	生徒指導・教育相談体制の確立と組織的な推進 ※	B					
	21	家庭・地域・関係機関との連携による指導	B					
② 特別支援教育の充 実	22	個別的教育支援計画及び個別の指導計画の作成と活用	B	A	●次学年につながるように確実な連携が必要。支援が必要な子、支援計画を立てるべきか迷う児童の観察を担任、学年団以外に見取ってもらえる体制が必要。今後、前向きに支援に向き合えるような助言がいただけるとうありがたい。○個別の指導計画を通して、学校全体を巻き込み保護者の対応ができたから。きちんと各担任が確認しているかチェック体制が必要だと感じたから。○子どもたちの様子を保護者に伝えながら、よりよい支援の在り方について相談することができた。○コーディネーターの先生を中心に、だいたい体制も確立されていると思う。●個別に指導が必要な児童への働きかけはできていたものの、保護者との連携はもっととる必要があると感じた。○●個別の指導計画をもとに、重点となる課題や対応を保護者の方と共に考え、常に指導に当たれるよう考えているが、短期の目標と長期の目標の設定が曖昧になっている面があり、意識する必要がある。●教育相談・特別支援に関わる児童・保護者・他機関との連携が不可欠です。生徒指導との関わりも多く、その数は増える一方なので人員が必要で、学習室にも教員を配置できるかというのですが…。○日々時間がない中で、上手く時間を見つけて組織的な取組が行えていると思います。○特別支援教育部会ができたことで、児童の特性や実態に応じて、個別の指導計画作成を検討したり、就学指導委員会をもたることができることができた。	○教頭はじめ、養護教諭、特支教育担当の教諭の連携とかかわりに安心している。今後は、幼保小でも繋がついていきたいと思います。○様々な催しに参加する機会も設けてい力を入れていると感じる。○個に寄り添い、組織的に指導していると感じる。	人的資源に限りがあるので、常にサポートをいただくことは難しいが、活用していくことが、保護者の理解の向上につながるっていくと思う。学年での情報共有をしかり行い、学校につなげていくことが大切である。特別支援コーディネーターの教員が、学年学級を観察しに行ける体制をつくる。気軽に学級の様子を身に行ける体制を全体共有する。特支の年間の動き、見通しを年度当初につかつと共通理解することが必要である。分からないいま動いている担任が多いように感じる。	  
	23	組織的・計画的な特別支援教育体制の確立	B					
	24	関係機関と連携した相談体制の充実	B					